

インターネット平和博物館づくり

記憶と知識の集約と共有のために



50年の傷みを抱いた原爆ドーム撮影ネガ：松重 美人氏撮影

野口 昇明 Nobuaki NOGUCHI
平和博物館を創る会 理事
e-mail : nognob@peace-museum.org

概要

1995年8月、太平洋戦争そして被爆から半世紀が過ぎたこの年、時代を記録した多くのネガフィルムを50年という時間による損傷から修復する試みが行われた。

それはコンピュータ、とりわけ進歩の著しいパーソナルコンピュータという新しい道具を使った、わが国はじめてと言える本格的なデジタル修復であった。そして、この歴史を記憶したネガのデジタル修復は、歴史・記憶の保護としての意義だけでなく、はじまったマルチメディア時代における平和活動についてのマイルストーンとなった。

歴史の記憶の修復と保存を目的にはじまった写真修復、そして、その画像を捉えた写真家の意図・視点の再現へ。さらに、これらのデジタル画像とマルチメディア技術を加えたサイバースペースでの平和に関する情報・知識のグローバルな発信とその共有のためのWeb Site (JPM : Japan Peace Museum) 構築へと続く私たちの活動について報告する。

1. はじまり：薄れる記憶と朽ちるイメージの修復

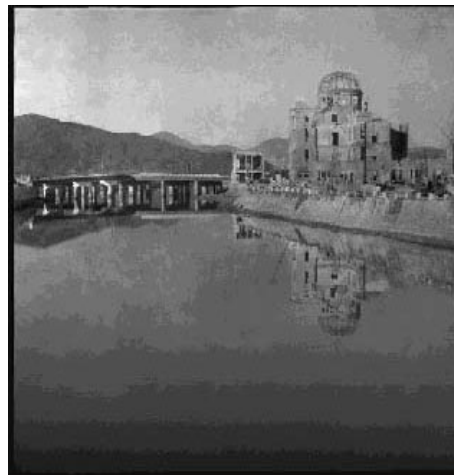
50年という時間は、戦後日本の復興・経済成長とともに、戦争の記憶も、またその時代を写した写真ネガも劣化させていた。

8月6日の被爆数時間後の広島市内を撮影した松重美人氏の写真も同様であった。また、戦時下、しかも被爆直後の劣悪な環境で処理された撮影ネガにとっては通常の経年変化に重ねてネガフィルムの危機が迫っていた。

私たちはこの年1995年に、松重氏の撮影した被爆当日の市内を撮影した5枚と、被爆後始めて写されたと言われる原爆ドーム（広島市産業奨励館）の写真を合わせた6枚のネガ修復に取り組んだ。中でも原爆ドームの写真は、ネガフィルムのデジタル修復をする上での象徴的な役割を果たした画像であった。

ネガフィルムには無数の傷みが付けられていた。それらは明らかに後から付けられた傷であったり、あるいは経年変化によるネガの画像自体の曇りや膜面のはく離(劣化)であったり、また撮影直後のネガフィルム現像処理段階でのムラやピンホールなどであったりする。それらが総合されて50年の傷みとなっていた。(表紙写真参照)

高解像度でスキャン：デジタル化されたネガのイメージからは克明にそれらを見ることができる。デジタル修復は、その傷みの点一つ一つを検証し埋めて行く作業である。そして、コンピュータによるネガ修復はデジタル画像処理そのものであって、ここではあらゆる処理・加工が可能である。劣化・傷ついた画像については絶対的な修復効果がある反面、際限のない処理は「修復」を越えた「創作」との境界や、悪意による「改ざん」の危険とも裏腹である。デジタル修復は、タイムマシンで50年の時間をさかのぼり、そして、その限界を探る作業だと言えるのである。



修復ネガと創作ネガ：ネガ修復は現像処理以前に遡れない。

わたしたちは、このネガ修復の限界を明確にし、修復の基準づくりのために「デジタル修復倫理会議」を開催した。

これには撮影者の松重氏ご自身の参加をはじめ、写真家 林 重男氏、翌日のナガサキを撮影された山端庸介氏のご子息で、写真の管理をされ、前年にアメリカでのデジタル修復の経験を持つ山端 祥吾氏。支援企業と実際の作業に携わった関係者。会からは代表理事の永井一正、専務理事の岩倉 務が参加した。そして特別立会人として朝日新聞社草川 誠氏も加わった。

この会議の様子はビデオ撮影され、さらに写真修復の記録：「Ground ZERO/広島1945.8.6+」としてCD-ROM化され、1995年8月に行われた東京都庁での写真展「Ground ZEROの姿と実相」の会場にて展示・デモされた。

(このCDタイトルは、セッション4F：コンピュータ技術の活用にて紹介した)

2. 失われた画像部分の復元

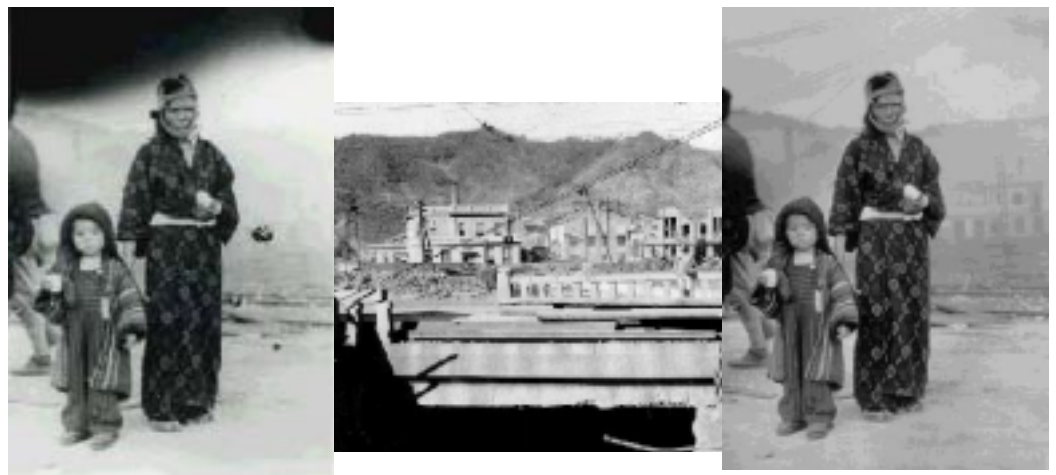
50年という時間だけでなく、処理方法、保管方法、そしてフィルムそのものの材質など多くの条件が重なり画像としてすでに形をなくしたネガフィルムも存在していた。

そのネガフィルムに対するその作業は修復ではなく復元である。

私たちが松重氏の写真に対して修復を行った前年の1994年に、会のメンバーでもある山端祥吾氏はアメリカでこの復元作業を行っていた。

被爆翌日の長崎に入った山端庸介氏は、その状況を100枚余りのネガに記録されたが、「救助され与えられたおむすびを手に持ち呆然と立つ母子」を写した半世紀後のネガは、空の部分は黒くカブリ、そこにあるはずの電線が隠され、また銀塩部分の薄れ・抜け落ちで背景の建物が消えかかっていた。

空の部分のカブリはコンピュータの画像処理技術で取り除き、隠された電線部分は修復できた。しかし消えかけた背景は、多くの人々の記憶と知識を集めて膨大な写真資料を元に、撮影された場所と建物についての検証が行われ、特定された。そして特定された場所・建物の画像を合わせて復元作業が行われた。



おむすびを持つ母子：修復・復元前、背景の画像、修復・復元後の画像：山端 庸介氏撮影、復元：山端 祥吾氏

この一枚の復元作業にも、実に多くの人々の知識と記憶が集約されて行われたのである。

時間の経過と共に、今後もこのような歴史写真の復元作業は増えてくるであろうと推測できる。そのためにも、残された写真資料のデータベース化は、分散された知識や薄れ行く記憶を留め、情報を集約するという意味でも重要な事である。

現在わたしたちは、山端氏の撮影した翌日の長崎の画像はじめ、Webにて公開している菊池俊吉氏そして林重男氏の画像についてデータベース化を進めている。

朽ち行く画像の修復を目的に行われたこの一連の作業を元に、マルチメディアによる平和表現や記憶・知識の集約であるデータベースなど、デジタル化した上での写真の利用についての具体的な方向が明らかになった。そして新しいメディア：グローバルなインターネットと合わせて、わたしたちのデジタル・マルチメディア時代における新たな平和活動がはじまった。

3. 修復・保存から、写真家意図の再現へ

私たち市民運動がインターネットWebにて平和活動を行う上でのアイデンティティをどうするかは重要な問題であった。

当時を記録した多くの写真は残したフィルムにその心も映していた。その一つが「パノラマ」である。これは、圧倒的な破壊の光景を“自分の両眼で見たままに一つの眺望としてフィルムに収めたい”と思ったに他ならないと考える。

そのパノラマは、最少2枚、多いもので20枚以上と、その時の状況によってさまざまである。原爆災害調査特別委員会医学班の写真記録員として、約2ヵ月後の広島を訪れた菊池 俊吉氏は、本来の使命である医学的な記録とともに、広島貯金局の窓から見た光景を6枚のパノラマ写真として残している。手持ちで撮影されたこれらからは、菊池氏のこの光景を前にした時の心が伝わってくるようだ。

最初に写した4枚で意図した範囲のパノラマとしての画像はカバーされていたが、後から2枚を間に追加撮影している。より確実な記録を求めたのであろう。

今でこそ誰でも簡単にパノラマ撮影できる時代だが、当時はカメラの三脚すらままならない状況下、パノラマに必要な画像のつながりも目測で、そして手持ちで撮影されたのである。

私たちは、私たちのWeb (JPM) での展示は、単なる写真展示ではなく、インタラクティブ・マルチメディアなどデジタルであることの特性を生かした、写真家の撮影活動・行動までを伝えることによって、目の当りにした彼らの意図や心を伝えたいと考えたのである。

パノラマで多くを記録された写真家に林 重雄氏がいる。氏はヒロシマ・ナガサキ双方を記録されているが、中でもヒロシマの2つの360度パノラマは圧巻である。

一つは商工会議所屋上から撮影した原爆ドーム周辺の360度パノラマ。そしてもう一つは、ヒロシマ中心街にあった中国新聞社屋上からの360度パノラマである。

両方とも被爆2ヶ月後に撮影されたものだが、使用したカメラは違っている。原爆ドーム周辺には6×6のブローニーフィルムが使われ、合計12枚に収められている。そして中国新聞社からのパノラマには35mmカメラを縦位置に使い合計17枚のネガに分けて撮影されていた。

特に正方形の6×6フィルムでは手持ちで水平を保つのは容易ではなく、また立つ位置のズレにより、隣り合う画像の軸は、位置も角度も大きくズレていた。デジタルでのパノラマ制作作業からも、その撮影のご苦労を伺い知ることができた。



広島貯金局の窓から日赤病院・爆心方向を望むパノラマ：菊池 俊吉氏撮影

4 . JPMのコンテンツについて

この林 重雄氏のパノラマはJPMにて8月から「Panoramic Views of HIROSHIMA」として公開しているが、写真家の意図を再現できた例として自負するコンテンツである。



また、インタラクティブな特性を生かしたコンテンツとして、山端庸介氏の「翌日のナガサキ」「The Day After The Nagasaki Bombing」がある。山端氏もナガサキの光景をいくつかのパノラマで残しているが、ここでは、基本的に撮影地名メニューから指定して画像を表示するものだが、その他に撮影順に表示される画像をスライドショーのように見たり、ナガサキの地図上にプロットされた撮影点を追い、撮影の足どりをたどるように見たりすることができる。などの、写真家山端庸介のカメラ(眼)を通して、インタラクティブに彼の視点を通した翌日のナガサキを体験することができるものである。

このように私たちのWebではデジタル・マルチメディアのメディア特性を生かしたコンテンツづくりによる原爆被害の現実を伝えることを、その実相体験をコンセプトとしている。

**The Day after
the Nagasaki Bombing**

そしてまた、資料・情動的コンテンツとして画像データベースづくりも進められている。菊池 俊吉氏による800点以上のヒロシマの記録は、撮影施設、場所などで分類され、菊池氏の撮影メモと合わせてヒロシマの地図上から選択し見、また読むことができるヒロシマ画像ライブラリーである。

しかし、ここに残念な事例がある。

Oct.1945 Hiroshima

公開を原則とするインターネットでは悪意の使用に対しては、ほとんど無防備である。これまでも多くの例があり、Webでの公開に際して公開する画像解像度の縮小と画像自体にウォーターマークを入れなければならないという現実を突きつけられ、そしてデータベースとしてでなく、画像記録のライブラリーとしての公開が主となってしまった。

デジタル・マルチメディアの象徴であるインターネット時代では、情報は地球規模で瞬時に広がる。こうしたグローバルな環境の中、インターネットでの情報発信は平和活動にとっても非常に効果的である反面、悪意の危険に対しても常にさらされている状況にある。しかし、悪意の例はインターネット特有のものでもなく現実の世界でもあることである。印刷による出版と同様に、平和を伝えるためのコンテンツをガードする、あるいは制限をかけた公開は、伝える効果が大きく低下する事は間違いない。

私たちのWebは、やはり公開が基本である。「正しい情報を正しく公開することによってのみ、悪意を駆逐できる。」と信じて、情報を提供していただく写真家たちの理解を得たいと考えている。

5. 平和博物館の「もの」と「こと」：活動の分析とこれから

市民運動：平和博物館を創る会は、その名の通り、わが国に公的な平和博物館をつくる必要を訴えつづけ、また出版活動を中心に平和に関する情報発信を行ってきた。

活動のルーツは一冊の写真集「広島・長崎：原子爆弾の記録」の出版である。以後多くを出版し、最近では世界の核・放射能被害を包括的に捉え、次世紀に向けての核の時代 20 世紀を総括して日本ジャーナリスト会議賞の大賞を授賞した「核の 20 世紀」の出版がある。

私たちのWeb(JPM)での平和活動も、これまでの活動をベースにするものだが、新しいメディアは、出版や展示や広報などの、これまで独立した多くの活動を総合するものと考えている。

今後の活動を考える上で、平和博物館と平和活動について考えてみる。

デジタル、マルチメディア、そしてインターネット時代。現在、地球には大気層や電離層のような見えない新しい「情報の層」がつけられたと考えられる。それは、地球生物が棲む、現実の世界：Real Spaceに対し、仮想だがデジタル情報が行き交うCyber Spaceと呼ばれる層(世界)である。

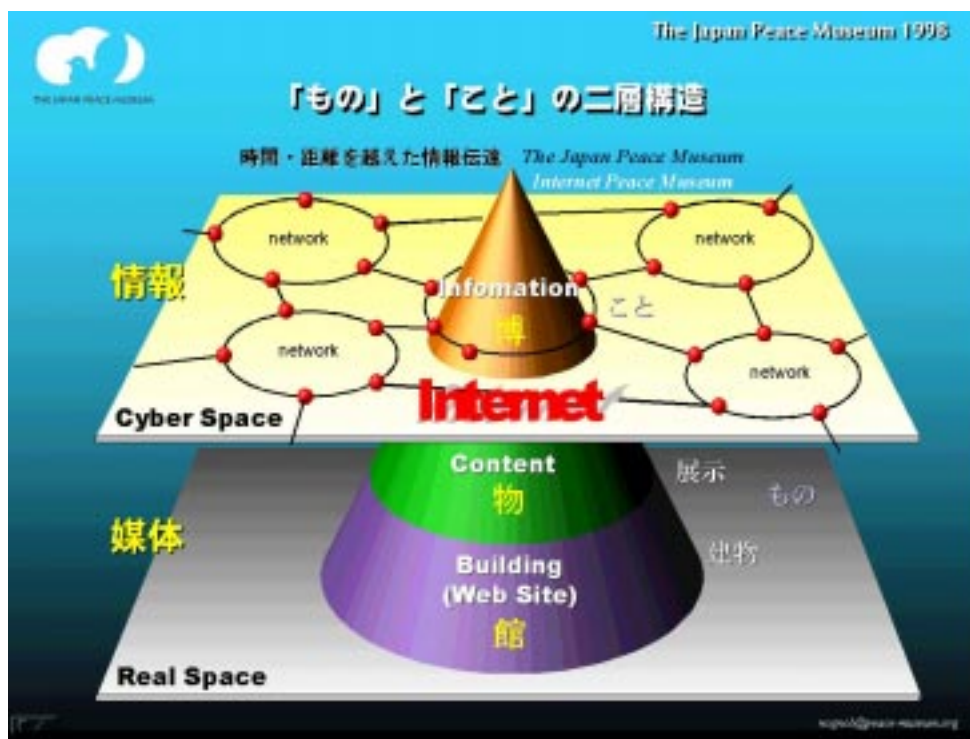
いま人類社会は、これらを総合した情報社会(Cyber Society)であり、新しい時代の平和博物館、あるいは平和活動もここでされるわけである。

この時代の「博物館」を考えると、地表：Real Spaceに立つ三つの層を持つ円錐をイメージできる。

地表に近い最下層には「館」：物を収め展示するための建物があり、中層には「物」：館に収め展示すべきコンテンツがある。そして最上層には「博」：コンテンツの持つ記憶・歴史や展示などにより導かれる知識・情報がある。これらにより博物館は構成されている。ここに収める物と展示が「平和」をテーマとすると「平和博物館」となるわけである。

私たちは、「平和博物館」創りを訴えて来たが、それは、朽ち果てる運命にある「歴史的な平和コンテンツ」の事実・歴史などの記憶と知識の集約を目指したものである。しかし「館」の建設・実現には、市民運動としては大きな現実の壁がある。

写真のデジタル修復の活動を経て私たちは、平和活動の「もの」と「こと」を考えさせられ、歴史的な写真とはネガフィルムでもなければ、プリントでもなく、歴史を捉えた画像そのものであるということと、ネガやプリントは、それを留め伝える媒体「もの」に過ぎないこと



Real SpaceとCyber Space：「もの」と「こと」の二層構造の情報社会：Cyber Society Illustration：Naglob

を実感して来た。また画像のデジタル化により、歴史の画像記憶は留められ、データベースによって、情報としての歴史の記憶や知識も集約できる事を、またデジタル画像はマルチメディアによる表現と共に展示の手法も変革し、時間や距離、そして建物や場所の持つ意味も変える事を実感して来た。

私たちの出版、展示、広報などの平和に関する活動の多くは、インターネット、Cyber SpaceにつながるWebにより情報や知識の発信が総合的に、そしてグローバルに行えるようになった訳である。

博物館は「地表に立つ円錐」と言ったが、私たちは「館」を持たない博物館である。言ってみるとそれは、情報主体の逆円錐の「博物館」である。しかし、これは私たちが望むものではなく、市民運動を基盤とした平和活動の「こと」を中心に考えた結果である。

私たちが望むのも、やはり地表にしっかり「館」を置き、朽ち果てる危うさとともに記憶を伝える「もの」：人類の歴史的コンテンツを保存・保管・展示し、その上で平和に関する記憶・知識：「博」を保持・発信する「平和博物館」である。

その実現に向けて、平和博物館を創る運動は、間違いなくこれからも継続される。

私たちのインターネット平和博物館(JPM)は、市民運動による平和活動の一つの形であり、デジタル・インターネット時代における、グローバルな平和に関する知識・情報の共有にとって重要な活動であると確信している。すでに多くの私たちのような「逆円錐型」、あるいは「円錐型」の博物館でもWebの開設をすすめ、その頂の「博」をCyber Spaceの事象へと突き出している。

インターネットは、それ自体がすでにネットワークである。しかし、平和に関する情報・知識を人類の財産として共有する“知のネットワーク”にするためには、これらの「博」の情報についての内容と、その存在についての地図づくりが必要である。今回の会議会場に設けられたインターネット・カフェへの参加者からも、平和に関するWeb Siteのリストの要求があったが、これは急務であると考え、International Peace Museum Site mapの作成を提案する。

情報社会での平和情報・知識共有のためにグローバルに連携されたライブラリー、ミュージアム、そしてアーカイヴへと、Real Spaceでのネットワークと共にCyber Spaceでの知識ネットワークの構築をすすめる必要がある。インターネットはその基盤であり、International Peace Museum Site mapはその第一歩である。

*



平和博物館を創る会

The Japan Peace Museum
〒105-0014 東京都港区芝1-4-9
03-3454-5859/9875(Phone)
03-3454-9800(Fax)

JPM Web Site:
<http://www.peace-museum.org>
e-mail info@peace-museum.org